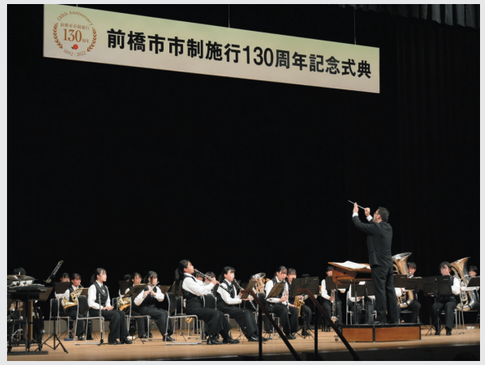
クローズアップ
CLOSE UP

本を通じて元気を交換

10月29日・30日、前橋BOOK FES2022を開催。全国から寄せられた約２万5,000冊の本が中央通りに並びました。その他、音楽や食、トークショー、雑貨販売などさまざまな催しも同時に開催。弁天通りや広瀬川河畔などのまちなかエリア一帯に、市内外から多くの人が訪れました。

各会場で130周年祝う

11月６日、昌賢学園まえばしホールや各市民サービスセンターなどを会場に、市制施行130周年の記念式典を開催しました。オンライン中継での山本市長のあいさつ後、各会場で市政の振興や発展に尽力した人へ功労者表彰を実施。最後にはステージ発表などで節目を祝いました。



いきいきまえばし人

吟詠コンクール全国大会で優勝
鈴木 愛琉さん・16歳
東善町

自分らしい吟を目指して

「私はおばあちゃん子で、大好きな祖母が行くさまざまな場所によくついて行きました。そのひとつが詩吟の教室でした」

鈴木さんが詩吟を習い始めたのは３歳の頃。当時は真似事のようにやっていたが、13年が経ち、今改めて感じる詩吟の魅力を語る。

「工夫しながら試行錯誤して練習をするのが楽しいです。歴史が好きなので、漢詩の内容に合わせて歌い方を考えるのも面白いところ。稽古では発声の仕方や節回しの調整、言葉の強弱、緩急を付ける練習をしています」

日頃の稽古が実を結び、９月に実施された全国吟詠コンクールでは、祖母（享年78歳）と話し合い決めた詩「江南の春」で優勝を勝ち取った。しかし、コンクールに手応えはなかったという。

「変声期を迎え、高い声が出づらくなったり音程が安定しなかったりしていることや、詩吟は声が高いほうが良いとされている中で自分の声は低いこともあり、自信はありませんでした。けれど、そのおかげで緊張せず思い切ってできたのだと思います」

今後は「成績を求めるよりも、先生の教えを自分なりに消化して、自分らしい吟ができるように試行錯誤していきたい。そして中学生から大人までが同じ部門で競う大会で、優勝できるような吟を目指していきたいです」と語る鈴木さん。幼い頃から指導する講師の教えや祖母の思いを胸に、鈴木さんの挑戦は続く。

あぐりチャンネル channel 11 農福連携

問農政課
☎ 027-898-5841

旬な農産物や生産者を紹介するこのコーナー。今回は天川大島町の社会福祉法人上州水土舎のよろず屋寒春（さむはる）を紹介します。

よろず屋寒春は、利用者の性格や適性に合わせ、農作業や精肉加工、惣菜販売など、自立を目指した就労支援を実施する施設。地域の人から寄付を受けた畑で、有機栽培のブルーベリーやカボチャなどを栽培しています。

収穫した農産物はジャムやコロッケに加工して販売するほか、施設の食事にも使用していますが、残った食事の活用方法にポイントが。食品残さは発酵させて飼料に加工し、別の事業所の養鶏事業で使用。さらに鶏糞を肥料として畑に還元する、循環型農業を実践しています。

また、今年から本市推奨の赤城の恵ブランド認証品「赤城の恵前橋産落花生」の原料となる落花生の栽培も開始。収穫やもぎ取り、洗浄などの作業を利用者が実施し、11月に無事出荷をしました。出荷された落花生は市内８生産者のものと合わせて焙煎され、12月中旬頃から順次販売予定です。

今後は保冷機能を備えた車両による移動販売にも一層力を入れ、高齢者の買い物支援や安否確認などの役割を担い、障害のある人と地域社会との共生を目指します。

上州水土舎ホームページ